



## 経済と文化：経済史の基礎的理論その二

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-08-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 西村, 孝夫<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24729/00001874">https://doi.org/10.24729/00001874</a>                  |

# 経 済 と 文 化

—経済史の基礎理論その二—

西 村 孝 夫

## I 問題の所在

本題目に掲げた「文化」は経済という文化（いわゆる実銭的・社会的文化）領域を除く他の諸文化領域の総称で、もちろん経済も重要な文化の要因と考えていることをまず断わっておきたい。ここで問われるのは、この経済と他の諸文化領域との相互作用、相互連関いかんということである。ウェーバーはその有名な論文「社会科学的及び社会政策的認識の『客観性』」で「文化現象の全体が『物質的』利害状態の所産として又は機能として演繹されるという古びた信仰」をしりぞけ、『『世界観』』としてまたは歴史的現実態の因果的説明の公分母としてのいわゆる『唯物史観』は断乎拒否せらるべきである」という。すなわち「経済的『衝動力』は『本来的な』、唯一の『真実な』、『窮極の審判においていつも決定的な』ものであるという独断的な欲求」や「あらゆる文化現象を窮極において経済的に制約されたものとして演繹する意味において『普遍的』方法として使用された類例なき無批判」をしりぞける（Weber, M., Ges. Aufs. z. Wiss., S. 166—168. 戸田武雄邦訳書 pp. 25—27）。またこれも有名な論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」において、観念が経済的諸条件の反映であり、また上部構造であるとする素朴な史的唯物論をしりぞけ（阿部邦訳 pp. 26, 45. Rel. Bd. I S. 37, 60）、「宗教改革が『歴史的必然的結果』として、ある種の経済的变化より演繹することが可能であるという見解から、解放されねばならない」（同上訳 p. 60. a. a. O. S. 83.）としている。マルクスの唯物史観に対する批判が終始一貫して行われている。だが、ウェーバーはマルクスの唯物史観を研究の準備作業の一つの方法としてすぐれたものであると述べ、この論文の方

法とは正に逆に「プロテスタント禁欲それ自体が、その生成と性格とにおいて、社会的、文化的諸条件、わけても経済的諸条件の全体によって、いかなる影響を蒙ったかを明らかにすることを必要とする」(阿部邦訳 P.145. a. a. O. S. 205) という。それは彼が「宗教改革の時代における物的基礎、すなわち社会的、政治的組織形態と、この時代の精神的內容との間には、極めて複雑な相互作用 (gegenseitige Beeinflussungen) が存在する」(阿部邦訳 P. 61a.a.O.S. 83) と考えるからに他ならない。ウェーバーにあってはすべての歴史現象には複雑な因果連関がある訳で、そのゆえに唯心史観や唯物史観その他様々の方法的見地からこの連関の探索を試みるという立場をとる。

マルクスの場合にはやはり究極的には現実的生活の生産と再生産が歴史における決定的要因であると考えているが、ウェーバーの見るように経済的要因が唯一の決定的要因であるとは決して考えていない。「経済的な側面が往々過大に重視されているが、その責任の一部は、マルクスとぼく(エンゲルスのこと)とが、みずからこれを負うべきものであった」が、「交互作用 Wechselwirkung にあずかったその他の諸要因に、しかるべき権利をあたえる時間、場所、機会が、かならずしもあったわけではなかった。」その交互作用についてはエンゲルスは「政治上、法律上、哲学上の諸理論、宗教観および教条体系へのその発展もまた、歴史的斗争の経過にその作用をおよぼし、この斗争の形態の決定にあずかって大いに力ある場合が多い。そこにはこれらすべての要因の交互作用があるのであって、ここではけっきょくこれらすべての無数の偶然性をつうじて必然的なものとして経済的運動が自己を貫徹する」(以上エンゲルスからヨゼフ・ブロッホへの手紙1890/9/21 ロンドン Marx Engels Werke Bd. 37. 1967 S.465)とも、また「政治上、法律上、哲学上、宗教上、文学上、芸術上等々の発展は、経済上のそれにもとずいている。しかしこれらすべては相互に反作用をおよぼしあい、また、経済的基礎に反作用をおよぼす。それは経済的状态が原因であり、これだけが能動的であり、他のすべては受動的作用にすぎぬということではない。それは究極においてつねに自己を貫徹する経済的必然を基礎にする交互作用 (Wechselwirkung) である」(エンゲルスから W. ボルギウスへの手紙1894/1/25) ロンドン a.a.O. Bd. 39. S.206)とも述べており、その真意は明白である。すでに一

八七八年の「反デュニリング論」でこのことは明白に述べられている。

上のウェーバーの言葉とエンゲルスの説明とから帰結する課題は彼らが交互作用というところの歴史文化の「構造」に関する詳細な分析である。交互作用があると指摘してみても、具体的に諸要因間にどのような交互作用があるかを仔細に摘出せねばならない。こうした課題を著者はかりに「文化構造論」とよんでいるが、この論議を全面的に展開するためには、「文化構造論」と題する一冊の大部の著書が必要となる。さし当たりここでは経済とその他文化との交互作用に的を絞って「経済の哲学」に必要な限りの試論を行うことにする。ただこの場合次の重要な指摘を忘れてはならない。たとえば「法的規範が、こんどは経済的土台に反作用をおよぼすというばあい、それは物質的生産関係そのものを直接的に制御対象とすることはできない。物質的生産関係の運動は、人びとの意識から独立した客観的法則性をもつものだからである」(藤田勇『法と経済の一般経済理論』p. 186)。この法律に関する指摘は他の諸要因についても充分考慮に入れねばならない。

以上のごとく従来、交互作用があるとか、ないとか机上で戦わされた議論にかえて、具体的な文化の諸様相の中で追求することが本稿の主要なねらいである。「経済と自然」と題する前稿(大阪府大歴史研究13号)の続篇をなす。

## II 経済と実践的・社会的文化

恒藤恭博士の分類によれば文化には経済、政治、法律などの「実践的・社会的文化」と、宗教、音楽、美術、文学、倫理、科学などの「観想的・精神的文化」とがある。この分類にしたがってまず経済と後者(経済を除く)との関連をとり上げようと思う。ある論者によれば「相互関係」には「相互依存」、「相互制約的」、「相互滲透的」、「相互矛盾的」の4個の関係を含むとされる(藤田前掲書p. 141)が、ここでは交互作用という観点から相互依存、相互滲透、相互制約を含めて、「積極的・能動的作用」を一方に考え、他方、相互矛盾を含めて「消極的・受動的作用」を考える。いずれも経済からと経済へと向う作用を意

味している。この様に考えた場合、まず経済と政治との関連が問題となろう。

## A 経済と政治

### 1 経済→政治

#### a 積極的・能動的作用

経済が政治に対して積極的な作用をするケースとしては、経済の発展が政治の形態を変えていく場合が考えられる。最も端的なケースとしては革命が考えられる。イギリスの市民革命にしろ、フランス革命にしろ、国内経済の一定程度の発展が、政治制度の変革を必要としたものであって、唯物史観の定式に見られる通り、「社会の物質的生産諸力は、その発展のある一定の段階において、そのときまでそれがそのうちで運動してきたところの現存の生産諸関係と、あるいはただその法的表現にすぎない所有諸関係と、矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展形態からその桎梏に転化する。そのとき社会革命の時代がはじまる。」(Marx. K., Zur Kritik der Pol. Econ., Volksausgabe 1934. S.5. 宮川実訳青木文庫 p.19)

#### b 経済的・受動的作用

経済の発展が著るしく遅れた国々は、発展した先進国の植民地、従属国化し、その主権を制限または奪取されることがある。これはいわば消極的な経済から政治への作用といえる。こうなると、ますます経済的な荒廃に至る訳で、第二次大戦前のアフリカ諸国のモノカルチュア的経済は正にそのよい例であった。

### 2 政治→経済

#### a 積極的・能動的作用

この場合、政治が直接経済を左右することはできない。それが作用できるのは経済の前提的諸条件に対してだけである。たとえば中央集権の成立やドイツ帝国の統一などが、国内市場の形成を促す場合とか、原蓄政策のように資本主義形成の前提条件をつくり出すとか、国家独占資本の場合のように独占資本に従属した国家が独占資本の支配、搾取体制を維持し、独占利潤を確保するために国営事業、個別経済機能の代行（たとえば労働力確保、不足原料生産物の配給など）、資本の集中・集積の促進、関税・輸出奨励金による貿易振興方策、高利潤を含む軍需発注、補給金制度などの例があげられる。

**b 消極的・受動的作用**

侵略，戦争による経済の荒廃がその著例である。あるいは中央政府による経済政策や計画が経済の実態を無視したものであったため，経済の運営を台なしにしてしまう場合も含まれる。

**B 経済と法律****1 経済→法律****a 積極的・能動的作用**

経済の変化に見合う法律の新立法または改正などがあげられる。とりわけかつては民法，商法体系の中に取まっていた法の範囲が近代になって拡大し，経済法規，労働法規あるいは社会法といわれる新しい分野に拡大してきたことは，近代における資本主義経済の進行に伴う現象である。

**b 消極的，受動的作用**

経済の実態にそぐわぬ法律が守られない場合，例えば密輸やヤミ取りといった事態が考えられる。事実上それらの違犯行為を禁止，所罰するという法規が存在しているに拘わらず，一向にそれが守られないということがある。

**2 法律→経済****a 積極的・能動的作用**

ここでも法が直接経済に作用を及ぼすとはいえないのであって，経済を構成する社会関係の中に立つ人間の意思関係を通して作用することはいうまでもない（藤田勇『法と経済の一般理論』）。たとえば貨幣や度量衡の制定を法律によって統一した場合，経済取引においてそれが採用されることがより便宜であるならば，その法規による制定が受容されるであろう。国際法の場合も亦同様である。

**b 消極的・受動的作用**

ある法規を制定したことがかえって経済の変化，便宜に適應しない場合がある。また古い慣習が経済の実態に合わなくなる時もある。度量衡の画一的な取組みが一向に守られぬ場合は，実さいの経済取引が旧制によって行われる方が便宜だからである。またかつては量は，京間，江戸間とって慣習的にきちん

と一枚の大きさが定まっていたので取引はし易かった。しかし現在六帖という概念は、畳の大きさはともかくとして、6枚の畳の入っている部屋というほどの意味で、ひどい時には端の一枚は大きく鉄筋の柱部が食込んで削りとられている変則の畳さえ一枚に数えられている。

### III 経済と思想的・精神的文化

#### 1 経済と宗教

##### c 経済→宗教

##### a 積極的・能動的作用

宗教は、その時代、その国において人々が経済を通じてどんな関係の下にどのように自然から物質をかくとくするかという諸条件によって制約される。したがってエンゲルスによれば「きわめて原始未開の時代に人間が自分じしんの本性や自分をとりまく外なる自然についていただいた誤まった、原始未開の表象から生じた」自然宗教から、「民族群がわかれたあとでは、それぞれの民族のもとで、それぞれに与えられた生活条件に応じて特有の発展を」し、「こうして造り上げられた」神々としての民族神へ、さらに民族の没落ののちに成立したローマの世界帝国における世界宗教としてのキリスト教へと発展していく。キリスト教の中でも「封建制度に適応した宗教」としてのカトリックに対抗して市民階級の台頭によるプロテスタント的異端の発展があった（エンゲルス「フオイエルバッハ論」Dietz M. E. Werke. Bd. 21, S23—5, 303—5）。マルクスもまた「商品生産者の一般的・社会的な生産関係は、彼らの生産物を商品として、したがって価値として取扱い、この物的な形態のもとで彼らの私的労働を同等な人間的労働として互いに関係させることにあるが、こうした商品生産者の社会にとっては、抽象的人間の礼拝をともなったキリスト教、ことにその市民的発展であるプロテスタンティズム、理神論などとしてのキリスト教が、もっとも似合いの宗教形態なのである」と指摘している（資本論 Bd. I S.93—96.）。

##### b 消極的・受動的作用

人々が宗教的迷妄から解放される時、あるいは宗教的な枠を外す時、それは共産化された理想の経済社会に到達した時かあるいは飢饉という窮迫した経済的危機におこまれた時であろう。宗教はその姿を消さざるをえない。いわば天国と地獄との両極端において。

## 2 宗教→経済

### a 積極的・能動的作用

宗教が積極的に経済に作用する側面の研究はマックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの精神と資本主義の精神」をもって代表させることができる。しかしこの場合も宗教が直接資本主義という社会関係に作用を及ぼしたとはウェーバーもいっていないし、またそんなことは不可能である。マルクスが「理論も、それが大衆をとらえるやいなや物質的な力となる」（ヘーゲル法哲学批判によせて）というように、経済的社会関係のうちに立つ諸個人の意思に働きかけることとなるのである。

### b 消極的・受動的作用

宗教が経済に決定的に作用するのは、例えば資本主義の発達という観点からみたヒンズー教のカースト制やイスラムの労働慣行などがとくに労働様式において障碍となる場合である。工場や食堂において共に働いたり、共に飲食することが拒否されるのであるから、工場制度は成立しえない。もちろんこれも人々の意思を通じてこうなるのである。

## D 経済と芸術

### 1 経済→芸術

#### a 積極的・能動的作用

芸術といっても音楽、美術、詩、小説などさまざまなジャンルがあるが、いずれの場合にしろ、こういう文化要因が生成するためには社会の生産力が高度に発展していることが前提であり、また聖・俗さまざまなパトロンの経済的バックアップなしにはその存続を期待し難い。音楽は教会・宗教団体とともに発展し、絵画もまた教会や宮廷の後楯があった。文学も資本主義の発展とともに大衆化したといえる。経済が芸術活動を支える根底であることがそれで明白で



ある。

**b 消極的・受動的作用**

経済が芸術を荒廃させる契機が現代の資本主義の中に見られることはしばしば指摘されている通りである。大部分の芸術家が金力に左右されて、純粋な芸術活動から遠ざかり、芸術自体の衰退をもたらすこととなる。さらに芸術活動が全く杜絶するのは、経済的生産力が低下してこうした活動を許さなくなった時である。

**2 芸術→経済**

**a 積極的・能動的作用**

労働歌、とりわけ協業労働の時のその例などでは音楽が労働能力を高める効果があることは知られている。美術はしばしば中世の手工業のうちから生まれ出て来た。絵画・彫刻は寺院の壁や天井への装飾から始まり、建築も同様である。金工や革工は武具や祭壇の装飾から発達した。

**b 消極的・受動的作用**

芸術至上主義ということがあるが芸術家がしばしば貧困に陥り、10人のうち1人または万に一人位しか芸術で食っていけぬという場合が多い。音楽・絵画・彫刻また文学も同様である。

**E 経済と倫理**

**1 経済→倫理**

**a 積極的，能動的作用**

各時代、各社会には特有の倫理が成立する。尚武、忠義、正義、節約、勤勉などは、それぞれの社会の各経済体制、支配的経済利害が要求する倫理に他ならない。「支配階級の諸思想を支配階級から切はなし、それを独立化し、これらの諸思想の生産諸条件やそれらの生産者たちについて顧慮することなしに、ある時代にはあれやこれやの思想が支配していたということを固執するならば、したがって思想の根底に横わる個人たちや世情を省略してしまうならば、例えば貴族が支配していた時代には名誉・忠節などの諸概念が、ブルジョアジーの支配の時には自由・平等などの諸概念が支配していたということができる」

(ドイツイデオロギーナウカ版(1)四三頁)が、これは上記の関係をひっくりかえして表現しているのである。

#### b 消極的・受動的作用

経済それ自体は各人の物質生活の豊富化を図ろうとする人間の正当で必要な営みにすぎないけれども、それに伴う流通過程や生産過程において、道徳をふみにじるような経済活動を行う商人や産業家が現われる。高利貸もまた同様に、他人の生活を根底からつきくずすほどの高い利子で悩ませる。つまり他人を非人道的に苦しめ、おとし入れることによって個人的な致富を図るものがある。これは倫理が経済の犠牲にされるというケースに他ならない。

### 2 倫理→経済

#### a 積極的・能動的作用

勤勉というような倫理感が強い国民の間では労働者はきわめて高い生産性を発揮する。これは西ドイツや日本の労働者の場合に見られる現象である。ノルマというソビエト式の労働倫理もある程度生産性の向上に役立つ。

#### b 消極的・受動的作用

上にあげたノルマは資本主義の下では逆に強制や義務と化し、生産低下への心理的要因となる。他方、倫理観の異なる異民族の間では取引上の信義・誠実は期し難い。

### F 経済と教育

#### 1 経済→教育

#### a 積極的・能動的作用

各社会はその社会に適応する人間類型をつくり出すための教育制度をもっている。それが学校という形をとらなくても、たとえば農地や手工業の職場であるいは狩猟場で教育は行われたはずである。したがって経済的に見てもそれに相応しい経済行為に向う教育がなされている。弓矢の扱い、農具や種子の知識、計算方法などなど、時代の進展とともに最も肝心なことが教育の中心課題となった。

#### b 消極的・受動的作用

教育の荒廃は資本主義のらん熱期には現われる。単なる知識のつめこみや立身出世主義的教育が結末として現われる。あるいは資本主義的工場制度内部における知的蒙昧化が行われる。新入社員に対する研修のごときまことに笑うべき蒙昧さが支配する。

## 2 教育→経済

### a 積極的・能動的作用

教育によって資本主義下の労働者としての適性が養われる。たとえば義務教育ということがそれでこれは労働者たるべき最低の知識の授与に他ならぬ。また資本主義が恰も自然法則のごとく教えこまれる。日本の文盲率の低さと労働生産性の高さとは無縁ではない。

### b 消極的・受動的作用

教育の荒廃が逆に生産力の低下につながる場合がありうる。低開発諸国あるいは発展途上国における教育の現況では、経済発展の重要な前提条件の一を欠いているといえよう。

## G 経済と科学

### 1 経済→科学

#### a 積極的・能動的作用

自然科学や社会科学の発達が経済社会の進展とともに歩んで来たことは周知の通りである。学問は宗教の従僕として、一部特権階級の中に独り占めされていたが、ルネッサンスとともに近代科学の花が開きはじめた。そしてやはり経済発展の先端に立つ国や都市から有名な科学者を輩出した。宗教は経済と最も遠くに立つと見られるが、むしろ宗教は科学よりも経済に近いといえる。科学は最も抽象的な理論的探究を行うものである。したがって科学の発達は高度の経済発達を前提としてのみ可能である。

#### b 消極的・受動的作用

資本主義の独占化に伴い、資本主義的生産に貢献する科学技術のみが問題とされ、その他の科学部門やとりわけ資本主義に批判的な社会科学は陰に陽に妨害される。こうして歪められた科学が結果することになる。御用学者や曲学阿

世の徒が横行するようになる。公害（これは工害・交害とかくべきだが）に対するまちがった企業擁護論の数々を見よ。

## 2 科学→経済

### a 積極的・能動的作用

近代科学の発達が発達産業技術の高度化を通して近代経済の発展の大きな前提となったことはいうまでもあるまい。

### b 消極的・受動的作用

科学の未発達と経済的停滞とは相即関係にある。

## VI むすび

以上見て来たように、経済的下部構造と上層のイデオロギー諸形態との間には交互に向かう様々な作用（Wechselwirkung）が存在することが明かとなった。ただし、ここでも充分注意を要する点は、経済は凡ゆる他の文化、社会、歴史のいわば基礎をなしていることである。この下部構造を欠いては他の一切は無といえる。そういう意味で窮極的には経済が他の一切を制約している。したがって上層から下部構造へ向かう作用は相対的であり、またすべて経済関係を構成する諸個人の意思を通して間接的に経済にその作用を及ぼすのである。経済の中でも最も根底的なのは生産的労働であり、これが一切の根底といえる。アダム・スミスが国民の年々の労働はその国民が年々消費する生活の必需品ならびに便宜品を提供するファンドであると述べているあの『国富論』の冒頭の語はこの上の事実を述べて磐石の重みをずしりと感じさせる。この事実を軽視して、問題のいわゆる「相互作用」を単なる相互関係、等しい意味と比重をもつ方法上の分析道具ぐらゐに解釈してはならない。いわゆる「文化人」のみとめたがらぬ事実、人間のもつ文化は、田畑や工場や荒海で行われる汗と脂とにまみれた生産的労働によって支えられ、その素材を提供されているということである。議事堂、六法全書、聖書、絵具、のみ、バイオリン、原稿紙、学校などの設備や文化に関する必需品は一体何人の手によって生産され、建設された

ものであろうか。そして「文化人」の生活必需品も。